特別寄稿　分析協力者･宮城教育大学教職大学院 田端健人教授より

令和４年３月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めています。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものです。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていきます。

【分析協力者プロフィール】

宮城教育大学　教職大学院　　教授　田端　健人　氏

＜研　究＞※科学研究助成事業（科研費）・基盤研究 B

○研究題目「グローバル世界を視野とする学力・非認知能力の効果的学校モデル」

（2020-22 年）

「学力/非認知能力を効果的に育成するスクールリーダーのデータサイエンス」

（2023-25 年）

※　本研究を進めるチームは、田端教授他７名

○研究の概要

・　児童生徒の学力と非認知能力を向上させる「効果的学校」の姿を明らかにすること。

・　校長のどのようなリーダーシップが、教職員のどのようなコラボレーションが、教師のどのような学級づくりや授業や支援が、児童生徒の学力と非認知能力を効果的に向上させるかを明らかにすること。

※　全国学力・学習状況調査等を用いて、上記の研究を行っている。

＜経歴等＞

2019 年４月～　宮城教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 高度教職実践専攻（教職大学院）　教授（現職）

2021 年４月～　文部科学省　学力調査アドバイザー（現職）

＜主な著書＞

○『IRT 分析ソフト EasyEstimation による全国学力・学習状況調査の検証と経年比較』（パイデイア出版　2022 年 6 月 13 日発行）

○『子どもの言葉データサイエンス入門－jReadability の活用と検証－』（パイデイア出版　2021 年）

「学力」とは何か？

宮城教育大学教職大学院　　教授　田端　健人

そもそも「学力」とは何でしょうか？ さらに限定して、全国学力・学習状況調査（以下「全国学力調査」と略記）が測定している「学力」とは何か、ご存じでしょうか？

最も流布しているのは、「学力＝テストで点を取る力」という図式でしょう。「学力」といえば、高校や大学等の入学試験を連想し、試験のテスト問題を解く知識・技能と思うのではないでしょうか。教科書や参考書にある各教科の膨大な知識を記憶し、それを活用して難しいテスト問題を解く力、これも確かに「学力」です。しかし、全国学力調査で測定している「学力」は、このような「テストで点を取る力」ではありません。

文部科学省の通知「令和 8 年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」（令和 7 年 12 月 5 日）の、「4. 調査事項」（ウ）の出題内容の説明によれば、①として、「実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等」とありま

す。「実生活」で利活用する知力が「学力」です。「10%増量は、増量前の量の何倍か」という問題が、令和 7 年度全国学力調査で出題されましたが、これは実生活でありふれた問題でしょう。全国の児童の約 60%（約 60 万人）がこの問題に正答できないことが、学力向上の課題です。

また、調査の出題内容の②として、「知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等」ともあります。「実生活の様々な場面」で知識・技能を活用する力とか、人生や社会での「様々な課題解決」を「構想」する力、その構想を「実践し評価・改善する力」こそ、全国学力調査の「学力」です。この定義では、主体的に課題解決しようとか、率先して実践しようとか、改善しようといった児童生徒の主体性や意志の力が強調されています。決まったことを決まった通り反復する力は、全国学力調査の「学力」とは対極にあります。つまり、言われたことを言われた通りにする力を訓練する教育は、全国学力調査の正答率を上げるためには、逆効果です。

高度に文明化した社会では、多種多様で膨大な文字や記号や図表を主体的に読みとり、活用しなければ、一定の文化水準で生きていくことは困難です。「学力向上」とは、児童生徒が実生活や実社会を主体的に評価し改善し生きていくための意志や知力を向上させることです。それを「テストの点数を上げること」とはき違えると、本筋を見失ってしまいます。

子どもが廊下を走らなくなったら、学力が上がったという話を聞いたことがあります。その学校では、廊下を走ると危ないということで、全学年で学校生活の改善を試みました。走った回数を毎日グラフにして廊下に貼り出しました。日が経つにつれ、回数は、半分、三分の一、四分の一と減少し、その成果を各クラスで喜んだそうです。このように、子どもたちが自分たちの生活を評価・改善できるようになることこそ「学力向上」です。教科問題の平均点の上昇は、その後に自ずとついてくるものです。令和 7 年度全国学力調査の算数では、ブロッコリーの生産量の推移をグラフから読みとる問題がありました。答えは二倍です。こんな問題は、廊下を走る人数の推移グラフを日常で読み取っていれば、簡単に正答できます。

『ふくしま学力調査 学力の伸びを引き出した学校の取組事例集』は、児童生徒が生きる生活世界に密着した学力向上事例の宝庫です。例えば、ある中学校の取組「『自分にはこれがある、自分ならこれができる』自己肯定感・自己有用感を育む学校づくり」も好例です。この学校では、「対話と考え議論する活動を通して、道徳的価値について自分事として捉え、人間としての生き方について自覚を深める時間を確保した」とあります。また教職員全員で「生徒を伸ばす『ほめ方』」を共有し、生徒が「自分の考えを自由に表現する安心安全な学級風土」を醸成し、生徒による「アウトプットの機会」を確保したとのことです。画一的な一斉授業から、「生徒主体の授業へ変革」したともあります。

児童生徒一人ひとりが学びの主体となり、自分の考えを自由に表現すること、それを仲間たちが聞き反応してくれる手応え、役割を交代し、仲間のユニークな表現に触れること、それに共感し、あるいは自分との違いに気づくこと、こうした生き生きとした人間関係の中でこそ、自己有用感や集団的効力（私たちはできる）感も高まり、自分（たち）は学校や社会のエージェントだという意識も芽生えるでしょう。教科を超えたこうした底力が土台となり教科の「学力」も向上する、というのが私の学力データ分析と整合的です。結果としてこの中学校では、県平均を下回っていた学力値が、県平均を上回ったといいます。私はこの変革を「奇跡」と呼びたいですし、同様の「奇跡」は福島県のいたる所で、今日もまた起きていると信じています。